様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 4 月 8 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2005～2008
課題番号：17791680
研究課題名（和文）　老人保健施設における痴呆高齢者に対するＤＴ活動としての園芸療法の効果と評価の研究

研究課題名（英文）　A study of effect and evaluation of the horticultural therapy as DT for elderly with dementia in care facilities

研究代表者
寺岡 佐和（TERAOKA SAWA）
九州大学大学院医学研究院・講師
研究者番号：60325165

研究成果の概要：施設に入所している認知症高齢者を対象に、園芸療法を実施した。これまでの研究結果より、それぞれに好みの園芸作業があり、一人ひとりに適切なプログラムを提供する必要があることがわかった。園芸療法時には、いきいきとされている様子がみられるが、それぞれの入所者に適切なプログラム内容や、園芸作業が認知症の症状や認知機能にもたらしている効果という点については、今後さらに長期的に実施し、検討していく必要がある。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００５年度	0	0	0
２００６年度	1,200,000	0	1,200,000
２００７年度	800,000	0	800,000
２００８年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
総　計	3,200,000	360,000	3,560,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学
キーワード：DT 活動，園芸療法，認知症高齢者

１．研究開始当初の背景

それまで研究者が行なってきた、介護保険施設における認知症高齢者を対象とした園芸療法の研究より、園芸や農業の経験があったり、興味や関心がある者の方が、園芸療法が効果的であったり、園芸に関するどのよう

な作業でも効果があるというわけではなく、対象者一人ひとりに好みのプログラムがある可能性が示唆された。
そこで今回、Diversional Therapy（以下 DT とする）活動として認知症高齢者個々人を総合的にアセスメントし、各人に適した園芸療法プログラムを設計、実行し、さらに事後評価することで、より適切かつ継続的にＱＯＬを高めることができるようになるのではないかと考えた。

２．研究の目的

１）施設に入所している認知症高齢者について、DT の基本となる生活習慣や、社会的、文化的背景を総合的にアセスメントするための項目を検討し、アセスメント表を作成する。
２）アセスメント表を用いて事前調査を行ない、結果に基づき、対象者別にアクティビティや趣味・レジャーに関するプログラムと、精神的ケアを含む生活環境の工夫や支援について、他職種と連携して設計する。
３）設計した内容をふまえ、園芸療法のプログラムを検討および開発し、実行する。

３．研究の方法

１）アセスメント表の作成

研究者が介入して園芸療法を実施している施設において、これまでの園芸療法の活動記録から、必要もしくは有用であった生活習慣や、社会的、文化的背景に関するアセスメント項目を抽出する。同時に、施設でケアにあたる様々な職種に対して、入所者の全般的なケアに必要もしくは有用であった生活習慣や、社会的、文化的背景に関するアセスメント項目について調査する。抽出されたアセスメント項目を統合し、一つの共通したアセスメント表を作成する。

２）園芸療法プログラムの検討および開発

（１）園芸療法の活動により期待される効果

作成したアセスメント表を用いて対象者の事前調査を行ない、その結果をふまえて、個々人に適当と思われるプログラムや精神的ケアを含む生活環境の工夫や支援について、他職種と連携して設計する。設計した内容をふまえ、施設スタッフと研究者とで、ＤＴ活動として園芸療法のプログラムを検討および開発、実行し、実施後には行った活動を細分化し、その時の対象者の反応に基づき活動の効果について検討する。

（２）認知機能の維持に効果的なプログラム

ファイブ・コグ検査とクロモグラニンＡの測定を行い、経時的な変化を分析することにより、具体的にどのような活動あるいは行動が、どの認知機能に効果的に働きかけるのか、またどのような活動が精神的ストレスを軽減し、認知症の問題行動の改善に効果的であるかを検討する。

４．研究成果

１）アセスメント表の作成

初年度、ＤＴの手法に倣い、その基礎となるアセスメント項目を抽出し、アセスメント表を作成した。

具体的には、名前、性別や年齢、希望する愛称について尋ねる項目の他に、最近の心身の状態として、要介護度、認知症高齢者の日常生活自立度、障害老人の日常生活自立度、認知症関連の評価の項目、疾患、身体の状態や、移動、排泄、整容、入浴の自立の程度を尋ねる項目、そして、過去、現在、今後希望することとして、家族、仕事、一日の過ごし方、毎日の習慣、食事の習慣、飲酒・喫煙の習慣、家事、興味・関心・遊び、得意なこと・苦手なこと、好きなこと・嫌いなこと、健康法、人とのかかわりについて尋ねる項目、さ

らに、施設で現在実施している活動をはじめ、行なってみたい活動について尋ねる項目により作成した。作成したアセスメント表を用いて、研究者と施設の作業療法士とで調査した結果、現在の対象者の知識や趣味に影響を及ぼしている戦時中の生活についての情報をはじめ、どのようなアクティビティが対象者にとって望ましいか、園芸療法を適用するならば、どのような作業やプログラムが適当かなどについて検討するのに有用だと思われる情報を、短時間で効率よく収集することができた。今後も作成したアセスメント表を使用し、園芸療法を展開していく中で、さらにアセスメント項目を検討していきたいと考える。

２）園芸療法プログラムの検討および開発

（１）園芸療法の活動により期待される効果

園芸療法の実施においては、一貫して対象者のエンパワメントという点に重点を置き、土や植物に触れる内容の他に、どのような植物を植えたり育てたりしたいかを話し合って決めたり、収穫した野菜を使って調理して食べたりといった活動も行った。

園芸療法の実施にあたっては、作成したアセスメント表に基づき、園芸療法プログラムを検討し行った。また実施した活動を細分化し、その時の対象者の反応に基づいて活動の効果について検討した。その結果、例えば土や植物に触れるプログラムでは、手や体を動かすことによる運動の効果が得られ、等間隔で種や苗を植えたり間引いたりすることにより視空間認知の機能が鍛えられ、植物と草とを区別しながら抜くことにより、注意力が鍛えられる可能性が考えられた。また、活動についての話し合いの場面では、植えた植物のできばえをふり返り改善点が出されたり、新たに植えてみたい植物や、その生育方法についての情報が出され、自然な形で過去のことを思い出すことが促されエピソード記憶が鍛えられたり、他者の話を聞きながら発言することで注意力が鍛えられ、テーマに関連することを想起し発言することで言語流暢性が鍛えられる可能性が考えられた。収穫したサツマイモを使ったきんとん作りでは、思考力の中でも、特に計画力が鍛えられる可能性が考えられた。

（２）認知機能の維持に効果的なプログラム

最終年度は、ファイブ・コグ検査を実施し、記憶・学習、注意、言語、思考、視空間認知の各認知機能の状態についても把握し、各機能の向上に焦点を当てた園芸療法の実施を試みた。また、同時に精神的ストレスの状態が改善することにより、認知症の問題行動が軽減される可能性も考えられることから、園芸療法のセッションの前後にはクロモグラニンＡを測定した。認知機能の変化については、有意な差は認められなかった。また、園芸療法のセッションの参与観察では、積極的に作業に参加し、笑顔も多く、いきいきしていると思われた者であっても、必ずしもクロモグラニンＡ濃度が低下しているわけではなく、これまでの研究結果と同様、個々人で好みのプログラム内容があることや、適度の精神的ストレスにより、集中力や作業効率が高まっている可能性が考えられた。

これらの結果から、今後も長期的園芸療法を行い、ファイブ・コグ検査およびクロモグラニンＡの測定を実施し、その変化を経時的に分析し、認知機能とＱＯＬの維持に効果的な園芸療法プログラム内容について検討する必要があると考える。また、認知症高齢者を対象としたクロモグラニンＡの測定を現場で用いるには、手間と高

額な費用とがかかる。そのため、クロモグラニンＡ濃度の変化と対象者の反応とを併せて総合的に評価し、精神的ストレスの状態を改善することができる園芸療法のプログラム内容について検討すると同時に、将来的には、現場で簡便に、そして、より適切かつ客観的に精神的ストレスの状態を把握し、評価できるよう、参与観察時のポイントについても明らかにしていく必要があると考えられた

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①寺岡佐和，原田春美：認知症高齢者の継続的なQOLの向上を目指した園芸療法の方法に関する研究，看護研究集録 14，73－84，2007.

〔学会発表〕（計２件）

①寺岡佐和，小西美智子，原田春美：園芸療法での活動が認知症高齢者にもたらす効果について，第67回日本公衆衛生学会総会，530，2008.

②Teraoka S.，Konishi M.，Harada H.：Horticultural therapy for the elderly in care facilities after their returning to home, ICN Conference, Yokohama, 2007.

６．研究組織

(1)研究代表者

寺岡佐和（TERAOKA SAWA）

九州大学大学院医学研究院・講師

研究者番号：60325165

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし